

---

# 瓢箪から駒

ナナシデ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

瓢箪から駒

### 【Nコード】

N6216R

### 【作者名】

ナナシデ

### 【あらすじ】

月の海での聖杯戦争。その中でひょっとしたらあったのかもしれない話。

二回戦三日目の夜。毒の矢を受け休んでいたマスターが夜中に目を覚ますと、己のサーヴァントの姿があった。但し、サーヴァントの姿は普段とは違っていた。落ちなし山なし意味なし。

「すまないマスター。これは敵の二の矢を防ぎきれなかった私のミスだ」

アーチャーはそう言うが、これは俺達二人のミスだと思う。アーチャー一人の責任では決してない。

そもそも、相手が、少なくとも相手のサーヴァントがマスターを狙うことに躊躇いがないことは初日にわかっていたはずなのだ。だから、俺はもつと周囲に気を配るべきだった。

第一回戦で偽りだが友人であった慎二を下し、進んだ第二回戦。マスターは年老いても力強い一人の騎士だった。正々堂々とした常に公平であろうとするそのあり方と覚悟に、俺は気押されかけた。また、気押されかけたというその事実に見つめ直す必要性があることを痛感させられた。

しかし、彼らはマスターとサーヴァントとして認めあうことができていないようだった。一日目に潜ったアリーナで、アリーナ全体に毒の結界を張ったサーヴァントに対し、マスターが苦言を呈する姿を見ることができた。

その姿に違和感を覚えつつも、二日目。一日目の結界の基点を中心にサーヴァントが残した痕跡を探る。幾つか見つけることができた彼らの遺物は、ラニという少女に預けた。五日目に占星術で彼らの事を知ると言っていたが、遺物だけでも多くの情報を得ることができた。

そして、三日目。つまりは今日。

俺達は姿の見えない射手から逃れるために、アリーナへ駆け込んだ。

学園が安全地帯というのは嘘ではないが真実でもない。戦争中に完全な安全地帯など本来あるわけがないのだ。

今日という日が始まった瞬間から認識したぴりぴりとした痛いほどの緊張感。部屋から出た俺達が一階に足を踏み入れた途端、それは空気を凍らせて殺気へと変わった。

アリーナでも執拗に追いかけてくる敵の姿を燻り出すため、目指したのは姿を隠す場所のないひらけた空間。四方にワニのようなエネミーがいる場所だ。しかし、そんな俺達の行動は読まれていたらしい。今だ姿の見えない敵の声とともに放たれた矢は俺の頭を貫く前にアーチャーの手に握られた双剣によって叩き落とされた。

そう、俺の頭を狙った矢は叩き落とされたが、その矢の影に隠れていた二の矢は俺の腕をかすってアリーナの床に突き刺さった。だが、かすっただけ。かすっただけならこの矢は問題にならないはずだった。

その直後、体を襲う悪寒さえなければ。

俺は自分の体を支え切れずに床に膝をついた。

「そのうち呼吸もできなくなる」

相手のサーヴァント、緑の衣装に身を包むアーチャーの言葉がやけに苛立ちを煽る。

それを無視して、生き残るために必死に遠のく意識を繋ぎとめ、足を動かした。

そして、毒に侵された体を引きずって、なんとか部屋まで戻り、

今に至る。

とりあえず、今回の事は俺達二人のミスだとアーチャーの言葉を否定した。といつても、変なところでまじめな部分がありそうないつの事なので、どこまで聞きいれてくれたのかわからないが。

「ああ、了解した。次に会う時にはこちらの力を見せてやるうじやないか。そのためにもマスター、今はゆっくり休んでくれ」

今だ、苦い顔であったが、少し表情を和らげて言ったアーチャーの言葉に今は甘えさせてもらうことにしよう。正直に言つと、体がだるくてしょうがない。

大丈夫か、マスター。

そんな声がきこえた気がした。

夢うつつのまま目を開けると、ぼんやりとした視界に自分のサーヴァントであるアーチャーの姿が映った。

「やはり、辛いのか。待つてる、今水を持ってくる」

ああ、そう言われてみれば体が異常を訴えている。火で熱せられているように熱いくせに、凍りついた海の中に突っ込まれたように寒い。

エプロンをつけたアーチャーが戻ってくると、片手に持ったコップを差し出してくる。コップの中には水がなみなみと注がれていた。「ほら、マスター飲めるか？」

そう言われて受け取った水をありがたく飲もうとして　俺は盛大にむせた。

「マスター!？」

悪かったと思う。だからそんなに怒らないでほしい。

「ほう。私が怒っているように見えるだと？ それは、それは。マスターは何か私が怒るような事をした自覚があるのか？」

笑っている。アーチャーは笑っているが、目が笑っていない。さらにいくなれば、その笑いも冷笑、嘲笑の類いだ。

「ゴメンナサイ！」

いや、もう謝るしかないと思う。だって怖い怖すぎる。これだけの恐怖を覚えたのは初めてかもしれない。…俺はなぜ敵ではなく味方に恐怖心を味わわされているのか。

でも、弁解させてほしい。身長180センチ以上の男が、当たり前のようにエプロンを装備しているのだ。…しかも、鎧の上からいや、他にどうしようもなかっただろうことはわかる。わかるが、驚くのは仕方ないと思う。

「全く、人の気も知らずに嘔き出すとは。主人の様子に気をもんでいた僕に対してあんまりだとは思わんか」

ハア、と一息をはいて言うアーチャー。どうやら許してくれるらしい。自分でも心配してくれたアーチャーに対してアレはなかったと思うので、その怒りももつともだと思っただが…アーチャーはエプロンをつけてどうするつもりだったのだろうか。

「エプロンをつけてすることなど決まっているだろう」

どうやら、疑問がそのまま顔に出ていたらしい。確かにそれはそうなのだが。

「今日は食べずにそのまま寝ただろう？ 目が覚めたのであれば腹がすいているだろうと思っただけ。簡単に粥でも作ろうかと思っただが、余計なお世話だったようだな」

「え？」

今何かおかしいこと聞いた気がする。アーチャーの舌鋒が珍しく

鋭くないとか、優しさを感じるとか色々あるけど……

「アーチャー…料理できるの？」

最近では料理が出来る男性も珍しくはないと言うが、料理の出来る英雄というのはあまり思い浮かばない。剣を使い、弓を使う武人であるアーチャーが料理出来るというのはあるのだろうか。なにせ、この方がすごいやすいと教室の机と椅子を素晴らしいまでのバランスでジャングルジムチックに組み上げた男である。

「ふむ、人並みには。と言っておこうか」

そう返してきたアーチャーだったが、やはり疑念の目を向けてしまふ。俺からすると、アーチャーが料理ができるというのは信じがたい。

「それは挑戦と受け取るぞ、マスター」

素直に胸の内を話してみたら、にやりとした笑みとともにそう言われた。ふっ、その認識を覆してやるうではないか。などと続けている。なんかアーチャーがノリノリな気がする。

腹がすいているのは確かだったし、とりあえず、食えないものが出てくることはなさそうだと、ありがたくアーチャー謹製の粥をもらうことにした。

……おかんだ。おかんがここにいる。

とりあえず、ちょっと待てと言いたい。お前はほんとにどこの英雄だ。どこにこんなに旨く粥を作る英雄がいる。しかも、絶妙な温度に塩気である。寝ている間に汗をかいた事も考慮されている。絶妙な塩加減だ。温度も熱すぎずかつ、ぬるくない。すぐに口の中に運べるが、熱くて火傷することもなければ、ぬるくて不味いという

こともない。

そして、エプロン。

筋骨隆々としたガタイのいい、そりゃ、同じ男から見たら羨ましくなるような肉体の持ち主が……エプロンつけてやがる。普通、似合わないと思うだろう。俺も思う。だが、だがしかし！ ……何故か似合ってしまったっている。ほんとになんだ。つけているエプロンは赤いシンプルな物だ。とりあえず、エプロンが花柄とかじゃなくてよかったと思う。ファンシーな花柄とかで似合ったら俺はどう反応すべきなのかわからない。

そして、おかなアーチャー……………駄目だ。一度思うとそう思えて仕方ない。普段の小言も相まって、ますますその印象は強まるばかりで。

窓の棧の埃を指でこすり取るアーチャーの幻覚が見えた。

「ふむ。なっていない。部屋の乱れは心の乱れ、という。掃除くらいきちんとすべきではないのかね？」

ぶっ！！ 駄目だ。小舅というか、どこぞの昼ドラの姑の様な行動がたやすく想像できてしまった。こみ上げる笑いを何とかこらえつつ、想像の中のアーチャーにお前はまり過ぎだつとツッコミを入れる。

先ほどの二の舞を踏む前に意識を粥だけに集中させることにする。

……………なんか悔しいが確かにこの粥は旨い。

ちらり、とアーチャーの様子を盗み見てみると、粥を食った俺の顔を見てアーチャーはにやにやと勝ち誇った顔をしていた。……………くそう、やっぱなんか納得いかない。ジャンルジム作つたくせして料理が上手いとかおかしいだろう。

……………今度、ハンバーグを作ってほしいと頼んだら作ってくれないだろうか。

翌日、対戦相手との紆余曲折の末。体調は元に戻った俺だが、己のサーヴァントの意外な一面を見た一夜だった。

(後書き)

アーチャーさんが好きすぎて、気が付いたらネタ神様がふってきました。

鯖一直線のルートがあるとしたら、好感度次第で見れる特別シナリオとかほしかったなあっていう妄想でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6216r/>

---

瓢箪から駒

2011年10月8日12時52分発行